

鳥取こども学園 学園だより



第40号
2016年12月1日

○発行
鳥取市立川町5丁目417番地
鳥取こども学園後援会
電話 (0857) 22-4206
<http://www.tottorikodomogakuen.or.jp/>
○振込口座
郵便振替 01490-9-9106
題字 尾崎悺子



創立110周年記念式典

クリスマスおめでとございます。
神の御加護と、皆様の変わらぬ愛に支えられ、鳥取こども学園は今年創立百十周年を迎える事が出来ました。ただただ感謝でございます。お心をお寄せ続けて下さいました総べての方々へ深く御礼申し上げます。ここでは皆様への感謝の念と私達の思いと致しまして、先日の式典で述べた式辞をあらためて掲げさせていただきます。

鳥取こども学園 理事長 尾崎 悺子

鳥取こども学園は一九〇六年、明治三十九年にキリスト教信者、尾崎信太郎と日本キリスト教団鳥取教会に連なる人々の協力により「鳥取育児院」として創立されました。キリスト教の愛の精神を基調とし、日露戦争軍人孤児救済を目的とした慈善事業でした。様々な困難を乗り越えつつ、昭和二十四年、「鳥取育児院」を「財団法人鳥取こども学園」と改称し更に、昭和二十七年に社会福祉事業法の制定に伴い、「社会福祉法人鳥取こども学園」に組織変更し現在まで歩んでまいりました。巣立つた園児数、五千六百八十名、現在学園で生活しております園児は百三名でございます。こども達の中には現在カナダでピアノの調律師として活躍している者、カナダの大学に留学している者、又、オーストラリアで温かな家庭を営んでいる者もいます。

明治、大正、昭和、平成と時代は激変し社会も大きく変貌しました。移りゆく社会の波に学園も揺れ続けました。公的支援の無い戦

前、学園の運営は困難を極め、又、昭和十八年鳥取大震災による園舎の倒壊とその後の移転、戦時中、大勢の園児を襲った食糧難など、私たちの想像も及ばない幾多の困難が続きました。これらの中、百十年という永い年月を一日も一瞬も歩みを止める事無く今日を迎えられましたのは、神の御加護と、本日ご臨席下さいました皆様を始め行政の御理解と、鳥取教会の皆様や地域の方々の方々の幾世代にも亘る温かいご協力、更に全国からお心をお寄せくださる人々のご支援、そして愛の精神に裏付けられた歴代の職員が果たしたからには他ならない事を、私たち学園にかかわります者は、常に心に刻み感謝いたしています。

創立当初より「慈善は恩恵を施すに非ず。社会は貧困者、犯罪者等に対し道徳的責任を有す。されば慈善的行為は、社会の懺悔的行為である」という思想のもと賛助会員を募り運営の安定を計りました。戦後、児童福祉法、社会福祉事業法など社会福祉に関する法律が整備され公的支援である措置制度も確立されました。昨年は四十年ぶりに職員配置増等の大幅な改革が動き出し、今まで取り残されていた社会的養護に、少しずつ目が向けられるようになりました。学園も現在、公的支援を基盤として運営されています。当然ながら私たちに課せられた公的責任は重く、ガラス張りの開かれた運営は勿論、感謝の気持ちと共に現状を公開し、情報を開示していくことは責務であると感じています。と同時に公的支援に頼るだけでなく自主財源確保への努力も怠ってはならない事を痛感しています。又、

創立当初の賛助会員は、その後子ども園後援会員として鳥取県は勿論、全国から援助の手を差し伸べて頂き、現在の学園の歩みを進める大きな力となっていました。

学園は創立百年に乳児院を設立し、以後十年間に障害福祉サービス事業はまむら作業所、ニート引き籠もりの支援としてとっとり若者サポートステーション、よなご若者サポートステーション、そして鳥取養育研究所などの設立が実現しました。今年六月より改正児童福祉法に、国連子どもの権利条約に基づく子どもの権利、こどもの最善の利益が明記されました。鳥取こども学園は創立以来、こども達の最善の利益を求めこどもの側に立つ姿勢を貫いてきました。その一つが小舎制です。より家庭に近い温かい場を与えたい。これは措置制度にこども達を当てるはめる画一的養護ではなく、一人ひとりに適応したきめ細かい個別的養護でなくてはならないと確信して歩んできた結果でもあります。今後私たちは、こども達との共感と連帯の中で心を一つにして、一人ひとりの幸福を願い、心身ともに健やかに養育する努力を重ねて行きたいと思えます。そして「家庭のモデルがここにある」と言える施設になりますよう努力を重ねてまいります。

一世紀余り昔、家庭に恵まれない子供たちの為に設けられた小さな養護施設は、現在0歳から成人までの弱い立場の

人たちの支援センターとなりました。そしてこれはとりもなおさず、その時代時代の社会と地域の要望に呼応した結果でもあります。今、こども達を取り巻く環境の変化は著しく、虐待や貧困が大きな社会問題となっています。施設は「預り育てる場」として現在に至ったのでありますが、今後は地域に放置されたこども達の虐待予防や、貧困家庭と言われる社会で見落とされているこども達、或いは様々な理由で弱い立場にある人たちへも、目を向ける積極性を養わねばならないと感じています。鳥取県は「子育て王国鳥取県」を掲げています。私達は地域と時代の要請にしっかりと応えられる施設として、今後も歩んで行かなければならない事を痛感しています。行政と地域と職員に支えられて百年を迎える事の出来た今、これからも、地域に開かれた施設、地域に愛される施設、地域と共にある施設であり続けたいと願っています。そして百年間変わる事のない「最も小さくされたものへ寄り添う姿勢」を護って行きたいと思えます。

創立百年という節目の場に皆様と共に巡り合わせました事を感謝致します。神の恩寵に感謝し、支え続けて下さいました総べての方々へ心から御礼申し上げますと共に、変わらぬご支援をお願い致します。式辞とさせていただきます。ありがとうございました。

法人本部

常務理事 藤野 興一 記

十月一日鳥取こども学園創立百十周年・乳児院創立十周年記念式典、感謝の集い、同窓会開催。感謝し新たな歩みへ。

- ① 全国各地から施設関係者・キリスト者・地域の支援者百三十名(式典)・九十名(感謝の集い)、百名の学園退所者・旧職員(夜の同窓会)は、百名の学園スタッフの下に開催。橋原正彦鳥取教会牧師の司式お祈り、尾崎徹子理事長の式辞(一面掲載)、井上靖朗鳥取県子育て王国推進局長、青木茂鳥取県社協会長の来賓祝辞、学園OBであり職員でもある中嶋進一君の謝辞、横須賀キリスト教社会館会長の阿部志郎先生(九十一才)の記念講演。更に感謝の集いから夜の同窓会へと、豊かな時をもった。
- ② 尾崎理事長の式辞にもあるとおり、一九〇六年一月十三日創設以来休むことなく続けられてきた鳥取こども学園の歩みは、キリスト教社会事業の先駆性・献身性・開拓性を発揮し、二〇一五年度から「社会的養護の課題と将来像」実現に向けた制度改革の牽引者としての歩みである。
- ③ 永年、制度改革から取り残されてきた児童養護施設、乳児院等の「社会的養護」は、職員配置増や生活単位の小規模化、切れ目のない自立支援、大学への進学保障等、子どもの権利、最善の利益確保に向けてやっとな動出したのである。
- ④ 鳥取こども学園の歩みを支えてきたものは、創立の精神である「最も小さくされた者の側に立つキリストの愛」であり、この百十周年の節目の年に改めて確認・継承する決意を固めることとなった。阿部志郎先生の特別講演と中嶋進一君の謝辞はそのハイライトであった。
- ⑤ 今後、子ども達の貧困や児童虐待・DVの世代間連鎖を断ち切るためにも、社会的養護施設等は、地域の子育て・家庭支援の拠点としてソーシャルワーク機能を十分発揮する体制を作ること、児童相談所を強化しながら、市区町村の要保護児童地域対策協議会(要対協)の活性化を図り、官民協働体制を作ることが重要である。
- ⑥ 日本の養育危機に対応するために、「一般家庭」よりも「社会的養護」の養育の方がはるかに優位な体制を作る必要がある。子育てに困った親が進んで預けたくなるような「優れた施設等」を創り上げない限り日本の養育危機を克服できないと言わねばならない。
- ⑦ 更に、胎児期、新生児期、学童期、思春期、青年期等、愛着形成から自我形成、自立に至る個別養育の質を問うものでなければならぬ。市区町村と民間社会事業を結ぶ地域のネットワーク構築が必要である。一層のご支援をお願いしたい。

児童養護施設

鳥取二ども学園

副園長拜命にあたり



副園長
山根 章明

平成二十八年九月一日付で、児童養護施設鳥取こども学園主任事務員より副園長及び法人事務局次長に拜命されました。

私は、乳児院創設の際に児童養護施設部門の事務に採用されましたが、その平成十七年度以降は、乳児院創設、退所児童アフターケア事業受託、第二児童棟老朽改築、地域若者サポートステーション事業受託、診療所開設、地域小規模児童養護施設開設（現在三ヶ所）、障がい者就労支援事業開設など、児童養護施設や法人事業で大きな出来事がありました。

新規事業の予算編成や手続き等、事務職の関わりは重要であり、ここに掲げたものは何かしらの役割を与えられ処理してきたもので、頼られると断れない性格が災いしています。

予算的に事務職員の配置が難しい事業もあり、児童生活援助事業／自立援助

ホーム鳥取フレンド・倉吉スマイル（現鳥取スマイル）の会計事務の一部を常務理事がされていた事を知り、私が引き継いで処理するようにし、数年後に他の事務職員へバトンタッチしました。

はまむら作業所（福祉サービス事業）の初年度は、決算が心配で声を掛けた所、責任者もどうすべきか困っていたので、他の事務職員を巻き込んで、日々記録されているデータを基にエクセルを駆使し、確認と決算書類作成を一週間程で行った事もあり、その翌年も恒例行事かの如く継続してサポートするようになりました。

この他、地域若者サポートステーション事業（鳥取・米子）も継続して会計処理等のサポートをしています。

ただ、事務職とはいえっても、文書を考えたり数字と睨めっこばかりのデスクワークでは疲れてしまうので、軽微な修理や、気が付いた箇所の建物の保全や敷地内の環境整備等も行っていきます。最近はその比率が多くなり、疲れている様です……。

児童養護施設の副園長とはいえっても、担当施設の事務だけでなく、他事業の事務処理もあり守備範囲が広いですが、努力していく所存ですので、修理でも何でも、これまで通りお声掛け下さい。

さて法人では、新会計基準に基づく拠点区分が十八に対し、事務職員（データ入力者）は八名、法人全体の職員数も

パートを含み二百名を超えており、財務及び人事の両面を強化する方策として、法人事務局に局長・次長ポストが新設されました。

拠点区分の事業内容及び、予算規模が違えば事務処理の量も違ってきます。収入が多い所は支出も多く、必然的に事務処理量も多くなりますが、基本的に事務的処理はどの事業も同じだと思います。

事務職員の平準化とレベルアップを求められており、事務局長を中心に事務部門の強化を図るべく、また、担当施設にとどまらず法人全体に気を配れるよう、広い視野で業務にあたりながら、限られた事務職員ですが皆で助け合って向上していけたらと思っていますので、今後ともよろしくお願いいたします。

職員自己紹介



すみれホーム
井上 千恵理

はじめまして、平成二十八年六月一日付で一時保護所すみれホームに配属になった井上千恵理と申します。

様々な境遇の子どもたちに出会い、早三ヶ月が経ちました。可愛い子どもたちに心から寄り添う養育を目指しています。今後共、よろしくお願い致します。

乳児院

鳥取こども学園乳児部

乳児院内で繰り広げられる

♪ じんまり・ほっこり♪

ご紹介

●「小さなお母さん」

電車が大好きなAくん。ある日、傘を買いにお買い物。お目当ての電車柄の傘を見つけ「ボクのなあー」と大喜び。なのに、レジ前のお菓子をを見つけ、傘は「ポイー！「買ってー」と大泣き。一緒に買い物に来ていた年下のBちゃんに「今日は買わないよ。」「さっき、おやつ食べたでしょ」と言われちゃいました。

●「がんばれ、がんばれの大会唄」

元気な三人組の女の子。ホットケーキを作っていた時のこと。材料をボールに移し交替でまぜまぜ……。仲良く十回ずつ「いち、にーい、さん……。」。途中、ひとりの子が「がんばれ〜」と応援しはじめ、それにつられ他の子も「がんばれ〜」の大会唄。

●「続：がんばれ、がんばれの大会唄」

ブームは続き、いつしかがんばれ合戦。おやつを食べるときにも「がんばれ〜」、お血洗いの時も「がんばれ〜」。

そしてトイレに行くのにも「がんばれ〜」……。何でも応援してくれる可愛い三人組の女の子です。

●『猫が大好き！』

一歳のCちゃん。とっても猫が大好きなんです。絵本を見ては「ねこちゃん」と高い声で呼び、猫を見かけると、「ねこちゃん」と追いかけます。お気に入りワンプイスには猫のプリントが。もちろん毎日のように着たがり洗濯が間に合わない程です。Cちゃんの猫好きは誰にも負けません。

●『ある日の土曜学校』

一歳のDちゃん。牧師先生のお話はまだまだ難しいかな？ いえいえ、そんなことはないですよー 大人同士の「ほんとう、さうですよね。」「とうとうやじとり、うん、うん。」と笑顔でうなずき会話の仲間入り。

●『いただきます〜』

おやつを前に、いただきます。のこあいさつ。まだ、いただきます。が上手に言えないDちゃん。「〜〜いただきます」と、ひとくちクッキーをかじり、隣に座っていた三歳のEちゃん（お）おいしいね。（顔を見合わせ、にっこり。美味さが伝わる笑顔で、ほっこり。

●『マン〜マン〜』

食欲旺盛な一歳になるFくん。離乳食の準備を始めるたびに「マンマン」



ピッカ ピカーッ

マン〜と大急ぎで寄ってきます。食卓イスに座ると両手を合わせて可愛いことができます。のポーズ。スプーンで食べたり、手づかみで食べたり。その豪快さにしあわせが溢れています♡

●『かみかみ』

お口いっぱいモグモグ。「Fくんおいしいね。」「モグモグ〜くん、かみかみ（噛み噛み）だ〜」と声をかけると、Fくんは自分の髪の毛をつかみ、ピンピン。キョトンとした表情を見せるFくん。（噛み噛み＝髪髪）周りの大人は大笑い。確かにそうだよねえ

●『Gちゃん語録』

「ののちゃんもい、い、い、がほい〜ちゃん

うだい。」とある日の夕食です。指差す先にあるモノは、おへら。そうなんです！ Gちゃん語録はまだまだたくさんあるんです。ナタデココ↓デコボコ、マンゴプリン↓ホードプリン、コンパイン糖↓コンパイト。Gちゃんイントネーションを紙面でお伝えできないことが残念です。

●『秘密の時間』

八か月になるHくん。夜中の授乳がまだあります。ミルクを飲んで眠りに……。と思いきや「はっ〜はっ〜」「あ〜っ〜」とご機嫌におしゃべり。ふたりだけの『秘密の時間』の始まりです。

●『いないいないばあ〜』

一歳のIくん。トコトコと部屋中を歩きながら隠れる場所を探します。満面の笑みで「はあ〜」と登場。可愛くてつい力が抜けてしまいます。彼のブームです。

●番外編『初心、忘るべからず〜』

とある実習生のお話。実習初日。あまりにも表情硬く、声掛けもぎこちない。（大丈夫かな……）と職員は少し不安に。しかし、彼の心には熱いものが。日に日に目線が子どもの高さへと下がリ、積極的「子どもたちと関わっていい。いっつの間にか彼のそばにはいつも子どもたち。別れの日、あいさつをする彼に子どもたちが「ごいごいの〜」「またきてね。」と声をかける。す、す、それまで

我慢していた彼の目からは溢れんばかりの涙が!! もう、あいさつも何を言っているのかわからない状況（笑）
いつの間にか職員の心にも灯をともしました。

日々、子どもたちの成長には多くの驚きや感動があります。もちろん、楽しいことばかりではありません。「こんなことがあったよ」と職員間でエピソードを共有します。子どもたちから発せられるたくさんのメッセージに気づき、寄り添って共感し、その時々を大切に過ごしています。愛してやまないこの子どもたちが、次なる人に繋がるために……。



お〜い ヤギさあ〜ん!

児童心理治療施設 鳥取こども学園希望館

希望館には「希望」がある

館長 西井 啓二

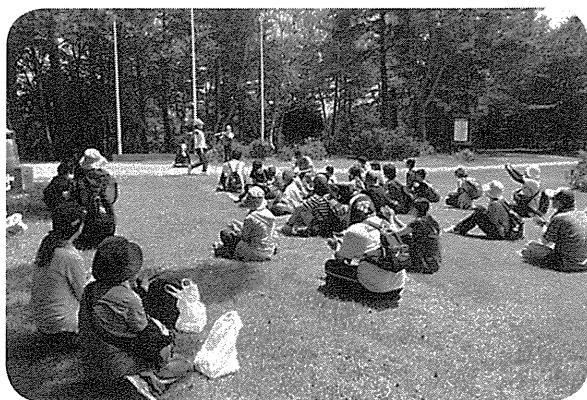
ギリシャ神話では、ゼウスがすべての悪と災いを封じ込めた箱をパンドラに持たせて人間界に送りました。開けてはいけないといわれていたパンドラは好奇心から、箱を開けてしまいます。飛び出してきたモノに気が付いたパンドラは慌てて箱を閉めますが、間に合わず、あらゆる災厄と不幸、恨みや嫉妬、悪意、悲しみ等々の負の感情が世界中の人々に拡がってしまいました。箱の中に最後



学園こども祭 姓名判断

に残っていたのが「希望」でした。「なぜ、人は不幸になるのか?」「なぜ、人は嫉妬や恨みを抱くのか?」「なぜ、私の家族が不幸に見舞われるのか?」を「パンドラが箱を開けたからだ」という説明をしています。箱が開かれるまでは、災厄も不幸も怒りも悪もなかったのですが、同じように「希望」もなかったのです。パンドラは箱の中身を知りたいという好奇心はありました。好奇心は希望にもつながります。神話なのだから細かいところは、さておいて、私達はこうして自分自身を納得させているのだなあと考えています。何か都合の悪い結果があると「なぜなんだろっ?」と問いかけ、振り返ってみると原因が発見されます。原因があつて結果と言いますが、実は結果があつて原因があるのではないのでしょうか。原因と関係なく結果で判断するというのは、間違っているかもしれませんが、子ども達は「今」という結果を生きているのだし、結果が悪くてもその原因は、必ずしも子どもでもないのです。

相模原でたくさん障がい者の皆さんが殺されてしまいました。障がいがあるのは結果であつて、原因ではありません。障がい者の存在を否定するのは、社会的養護の子ども達の存在を否定するのと同じことです。想像してください。世の中に障がい者が一人もいない、社会的養護の子ども達が一人もいない世界って



希望館 キャンプ

へんな世界なのです。障がいがあるのも社会的養護の子ども達も自己責任ではなく、その人やその子ども達のあり方や生き方のひとつなのです。産まれた子どもを育てるのは、大人の責任ですが、産まれた子どもたちの責任じゃないのです。

障がい者も社会的養護の子ども達も一定の割合で社会に存在するという結果、事実から目を背けるのは、歪んだ社会なのです。近年、社会的養護の子ども達に目が向けられてきていることは、長い歴史の中で画期的な出来事だとは思いますが、改革のスタートでしかありません。

出産予定の方が「産まれたら施設にお願いします。」という依頼をお聴きすることがあります。いろいろな「なぜ?」「これからは見守りと協力をお願いします。」責める言葉を思い付きます。施設長の会議であつても、親御さんを責める言葉を耳にします。でも、生まれてくる子どもには、何の責任もないのです。関係機関の会議で「私たち大人社会が産まれてくる子どもを喜びと共に受け入れようじゃないか」と話したことがあります。障がいがあつてもどんな環境、どんな御両親でも、どんな歴史があつても、その子どもを喜びと共に受け入れることの出来る社会を創り上げることが、糸賀一雄先生のおっしゃる「この子らを世の光に」の課題なのだと思います。

希望館には、たくさん光が輝いているのです。どんな状態でも、どんな時でも、どんな子どもでも受け入れるのだという約束をしています。実際にはとても難しいことです。それでも、希望館に辿り着く子ども達自身に「希望」を見いだしていただくお手伝いができることの喜びを職員は感じたいと思っています。

鳥取こども学園希望館は、小規模グループケアで生活療法にとりくんでいる数少ない児童心理治療施設です。全国から見学者や実習者が絶えません。それだけ期待され、モデルとされているのかと思います。まだまだ、課題がたくさんあつて、本当に子ども達の利益になっているのか日々の問いかけが続いています。希望館には、子ども達と家族の皆さん、そして職員員の「希望」があります。これから見守りと協力をお願いします。

保育所

鳥取みどり園

保育士として

主任保育士 下根 朋美

「あつ、先生〜！ お元気ですか？」
 「先日、買い物をしている時に背の高い女の人に声をかけられました。立ち止まって見ると、目の前には卒園児のＹちゃんとお母さんの姿が!! 高校生になったというＹちゃんは、昔の面影が残っているものの背は私より高くなり、しっかり受け答えをするお姉さんになっていました。大きくなったＹちゃんを見ながら、保育園に通っているのは人生の中でほんの数日間だけでも、人の根っこが育つ大事な時期を私は共に過ごしているんだと改めて感じました。」



東高生（実習）と一緒に



鳥取砂丘（園外保育）であそぶ

今、私は三歳児二十七人の子ども達と一緒に過ごしています。鬼ごっこ・お家ごっこ・虫探し……と興味のある遊びを見つけて夢中で遊ぶ子ども達。秋の運動会を終え、子ども達は友だちと一緒に活動することに楽しさや喜びを感じ、体だけではなく内面も育ってきているように思います。友だちとの関わりが増えた分、「〇〇ちゃんが〜って言った。」「△△ちゃんが遊んでくれん。」といざこざも絶えませんが、様子を見守ったり、状況に応じて仲裁していく事で自分の思いを相手に分かるように伝えたり、相手の思いを知ることや気持ちにズレが生じることがある事に気づけるようになって欲しいと思っています。

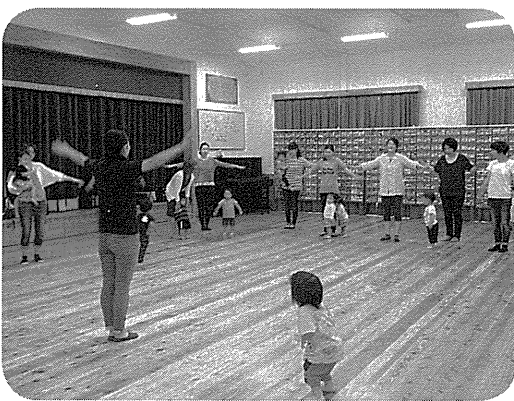
楽しかったこと、頑張ったこと、先生にほめられたことはよい記憶として大人になってからもずっと心に残っています。一つでも多くの出来事を子ども達の心に残せたら幸せだなと思います。

笑顔で寄り添って

保育士 森本 千恵

わくわく子育て支援センターでの一日が始まります。お母さん、おばあちゃん、時にはお父さんと来所する子どもたち。ちよっとドキドキした表情で部屋に入ってきますが、しばらくすると保護者の方の手を引き、好きなおもちゃやお気に入りのあそびをして過ごします。中には小さな小さな赤ちゃんもいて、来所されている他のお母さんたちに「かわいいなあ〜」「うちの子どもこんな時があったんだなあ〜成長って早い！」などお母さん同士の輪ができ、ほんわかとした時が流れます。

笑い声があふれ、子どもたちの楽しい声が響きわたるふれあいルーム。ここに遊びに来られることで、自然とお母さん



子育て支援センター 親子教室



子育て支援センター ふれあいルーム

同士が顔見知りになり、子ども同士も遊び友だちになり、一緒に子育ての時間を共有することになる……。

子育て支援センターの担当になり感じたことは、どのお母さんも子どもに向き合い、たくさんの愛情を注ぎながら子育てをしているという事。そして、毎日一生懸命頑張っているという事です。私自身、二人の子どもを子育て中なので、お母さん方の悩みは私も抱えている悩みだったり、乗り越えてきたことだったりします。

転動でこちらにおられるお母さんが「鳥取は、子育て支援センターがたくさんあるのでうれしいです」という話をしておられました。

「ここに来ることで、少しでも子育ての悩みや不安が消えたらという思いと、一緒に一番大切な時を共有していきたいという思いを日々感じながら、これからも地域に開かれた笑顔あふれる支援センターでありたいと思っています。」

診療所

二歳児の発達クリニック

心の『安定』と『不安定』

心の成長には、どちらもなくてはならないもの、

院長 川口孝一

この十月、「やわらかい風」(『ミズチル』の曲にもありますが、『産後ケア』の施設

です)から依頼を受けて、平成十九年栃木県で開催された「FOUR WINDS 乳幼児保健学会 第十一回全国大会」の公開講座、オランダの小児科医「ブローイユ」先生の『0歳児の心の秘密』のDVDを見ての勉強会の解説をさせて頂きました(因みにFOUR WINDSの第六回全国大会は本学園の職員の全面的協力を得て鳥取で開催しました)。

この講演の要点を一言で言えば、「乳幼児の心は、右上がりのなだらかな直線状に発達するのではなく、階段状にジャンプアップしながら発達して行く。そしてジャンプアップする直前に、「しがみつ

く」、「泣き叫ぶ」、「おこりっぽい」が増える。『不安定』になる『退行の時期』がある。生まれてから最初の二十か月の間に、十回位退行の時期とそれに続くジャンプアップの時期が繰り返され、それを経て乳幼児の最初の主な段階が終わる」とのことです。乳幼児を育てたりお世話した事のある方なら、不安定な時期に心身共に疲弊した経験があり理解して頂けるのではないのでしょうか。実際皆さんもジャンプする時に膝を曲げずにジャンプは出来ないでしょう。膝を曲げて姿勢を低くしてエネルギーを溜めて一気にジャンプしますよね。

実は乳幼児期だけではなく、このパターンは一生続いて行きます。最も大きなジャンプアップの時期は、一歳二〜三か月から二歳過ぎまでの時期と、思春期の時期(『第二の幼児期』とも言われます)です。大きく成長する時期ですが、激しく不安定な時期でもあります。そしてジャンプアップの時期と時期との間の平坦な時期は、そのステイジをしっかりと地固めする必要があります。それが不十分だとジャンプ出来ませんし、ジャンプした時にステイジが崩れてしまいます。地固めが十分できると、そのステイジに物足りなくなったり、その環境(ステージ)との間で軋轢や葛藤が生じて

『不安定』となり、ジャンプアップのためマグマだまり(爆発的エネルギーの溜め)が出来てきます。それに至るまでのステイジの地固めは、情緒的にも安定していかないといえませんが、時にはあるステージでの地固めに時間が掛かる人や場合もあります。例えば『不登校状態』の時などもそうです。私は『ハッピーな不登校を!』とよく言います。それは気持ち落ち着けて『安定』、焦らずにそのステージの地固めしっかりと行って欲しいからなのです(意味ある『退行』)。次に階段を一段飛び上がる時の『不安定』の持つエネルギー爆発力について考えてみたいと思います。

私は大学生時代より空手をしています。空手の突きや蹴りは、安定した体勢からより、不安定な体勢を作り、そこから生み出されるエネルギーを使って繰り出す方がより速く重くなります。山登りもそうです。少し前に重心が傾く姿勢で登った方が、倒れこむ力を利用して登れるので、足への負担が少なくなり疲れ難いようです(因みに昨年の『学園だより』に出てきた『私の足が攣り易さ』は下肢の血流の問題だと自己診断しています。江戸時代の飛脚もこの『不安定』から繰り出されるエネルギーを上手く使った走りをしてきたようです。現在の一般的な走法は、手と足を左右交互反対に出しますが、飛脚は同じ側の手と足を出して走っていたようです(浮世絵等を見てみて下さい)。

『不安定』の大切さをお話ししましたが、実は『不安定』と云っただけあって『危険』も同時にはらんでいます。ブローイユ先生の講演の中でも、そのことが出てきました。それは、『乳幼児突然死症候群』の発生時期と『不安定(退行)』の時期とが一致していた」と言う研究報告でした。どちらにも転び得るセンチタイプ(敏感な)時期だと云うことです。

『不安定』を嘆く必要はありませんが、親御さんや我々支援者はしっかりと子どもたちを抱きかかえ、見守ることは必要だということなのです。

追伸(特に我が同僚たちへ)・・・『不安定』と『安定』は一生続いて行くと云いましたが、例えば、今の職場を、仕事を辞めたくなる時期があるとするば、それは今の職場での次のステージへのジャンプアップの時期なのかも知れませんが、よく考えて決断しましょう。

児童家庭支援センター
子ども家庭支援センター「希望館」

◎四月から新しいスタッフを迎え、半年以上がたちました。お互いの性格がわかってきて、各々が人と関わるうえで大事にしていること、根本は一緒でも微妙に違う思いがあるということ、今までの自分の関わりをふり返るいい出会いだと感じました。ただ、人の意見を聞き、自分の見えていない部分を受け入れるということは難しいかもしれませんが、人がいい悪いも変わらないのは人と会うからこそだと思います。私たちはその出会いを相談に

来られる方にとって信頼できる、いい出会い になれたらと思っています。
(岸田)

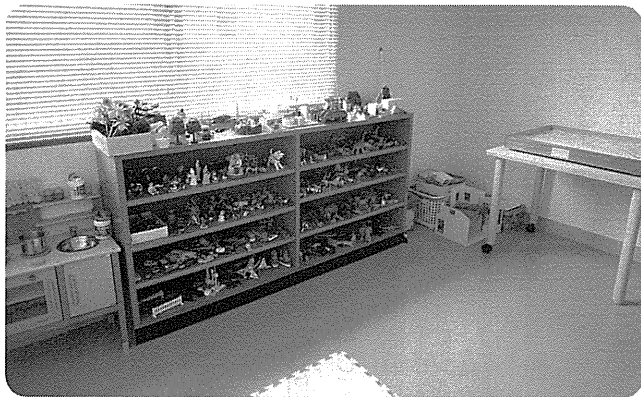
◎先日、子ども達と一緒に海水浴へ行った際に子ども達の無邪気に遊ぶ姿、いきいきとした姿に自分の小学生の頃を思い出しながら一緒に遊んで楽しんで遊びました。また、子ども達と同じ時間を共有する中で見られたたくさん笑顔にも元気をもらいました。

支援センターに来られる方々に寄り添いながら一緒に子どもが育つ喜びを感じ、「ご家庭に笑顔が溢れるようにこれ

からもひとつひとつの出会いに感謝し、人とのつながりを大切にしていきたいと思っています。

子育てに関して心配なことなどちょっとした悩みを気軽に相談でき、子育てに日々励んでおられる方々にとって心のよりどころにできる場となるように自分自身もスキルアップしながら支援にいかしていきたいと思っています。
(藤川)

◎文化や価値観が今の社会の文化や価値観とは別のものになっていることによつて、しんどさや苦しさを抱えている方が来所をされます。今までその文



カウンセリングの部屋

化の中で生きてきた方なので、それを変えることはとても大変なことだと思います。その際に支援者に求められることは、「寄り添い」になると思います。

常にも模索している状態です。親御さんや子どもさんと一緒に様々な気持ちを共有させてもらい、どのような寄り添いができるのかを考えさせてもらいながら、日々お話を聴かせてもらっています。
(滝河)

※家族・子育てについての悩みや、子どもに関するあらゆる相談に応じます。相談料は無料です。

◆電話相談
月曜日～金曜日 朝9時～夜12時
(緊急の場合は、)

休日、祭日、時間外も24時間対応
◆来所相談
開所時間
月曜日～金曜日 朝9時～夕方6時
専門の相談員が対応します。

里親支援とっとり

中国地区里親大会で

ステップアップ

里親委託等推進員 吉田 信彦

平成二十八年五月二十八・二十九日に、米子市で「第六十三回中国地区里親大会」を開催しました。中国地区の里親並びに関係者が一同に集い、盛会の内に幕を閉じました。鳥取県里親会のご尽力はもちろんのこと、多くの行政・児童福祉施設関係職員の方々のご助力によつて、参加された皆様に実りある学びを提供できました。大会の成功もさることながら、数社のテレビ局・新聞社が、このたびの大会の意義に理解を示して下さい、番組・紙面に大きく取り上げて下さったことも、貴重な成果です。
また、日本海新聞で月一回、一年間、里親の制度と取り組みについてのコラムを「里親支援とっとり」の名前で連載させて頂いていただきました。鳥取県のようなメディアで里親制度が取り上げられることによつて、あちこちで「里親ってなあに?」「里親っていつのはね?」「里親

をしてみたい」という話題があがっていると聞きます。「里親をしてみたいけど、うちば、子どもを養子にするのは難しい」という声もよく聞かれるそうです。里親になることは、イコール養子縁組すること、ではありません。役割によって四種類の里親があります。児童相談所が定めた期間、里子を家庭に預かり育てる「養育里親」。虐待を受けた子どもや、養育に特別な配慮が必要な子どもを専門的な知識・技能をもって育てる「専門里親」。里子本人の親族が実親に代わって養育する「親族里親」。里子の養親となることを希望する方となる「養子縁組里親」と、それぞれの里親に、それぞれの役割があります。

養子縁組里親は、里親登録の後、里親として里子を育てます。縁組の決心が固まると家庭裁判所で手続きをして縁組が成立します。その後は、「里親」と「里子」という間柄から普通の親子となりま

す。(詳細は、お問い合わせください)。養育里親・専門里親・親族里親に預けられた子どもは、里親と里親の家族、関係機関や、鳥取こども学園や乳児部の里親支援専門相談員が力を合わせて養育をしながら、里子の実家庭のサポートも平行し、環境を整えは「家族再統合」となります。里親の元で成長し、社会に巣

立って行く里子もたくさんいらっしゃいます。

是非とも、里親制度のことを正しく知ってください。

「ご不明な点、ご質問、ちよつと興味があるという方は、お気軽にお尋ねください。

◆「里親支援とっとり」

〇八五七(三)四三二一まで

自立援助ホーム

鳥取フレンズ

鳥取フレンズ・鳥取スマイル

統括寮長 山中 友子

今年度、鳥取フレンズは現在までに四人が退居しました。進学した子どもも一人、アパート自立をした子どもが二人、事情により他施設に移った子どもが一人です。フレンズで生活していた期間は進学した子どもは一年、アパート自立をした子どもは約一〜二年です。他施設へ移った子どもは半年以内で、転居することになりましたが、年齢が若いこともあり、他施設で専門の支援を受けた後、今後、再び自立を目指すために受け入れられることを考えています。

当然のことですが、それぞれの子どもがそれぞれの厳しい環境で育っていて、何かしらの虐待を受けている場合が多く、それに加えて本人の資質もあり、こだわりが強かったり、困難を回避する方法が負の連鎖を引き起こしている場合もあつたりして、状況は複雑です。障がい者の福祉サービスを受けて自立を目指す人もあり、自立の仕方も様々です。

これまで退居した人たちが本番で、「大に、やはり退居してからが本番で、「大変だ。」と言います。一人で暮らすことがつよいようです。ホームに居られるのは平均一〜二年くらいでしょうか。その



食事風景

間にどれだけの力をつけられるでしょうか。スタッフの思いとしてはホームでの安定した生活の中において、緩急をつけ、自分自身の課題に向き合うときを持つて欲しいですし、また、社会に出てストレスに感じている事が少しでも少ないことを望みます。そういう思いから苦言を呈することもあります。そして挫折をした時に繋がる人を持ち、たくましく生きていく力を持つていて欲しいと思っています。

昭和五十九年に学園の有志により、OBの家として発足したが、自立援助ホーム鳥取フレンズの始まりです。当時、児童養護施設を退所後、覚悟を決めて社会へ出て頑張っていたのに、社会の荒波にもまれ、挫折するという事態が何件も起こりました。(言葉では言い尽くせませんが)それをなんとかしたい!という切なる思いから立ち上がったものです。『居場所はあるよ』『一人ではないよ』という思いが根底にはあり、これまでの、また、これからも根幹となることを思っています。

一人ひとりの子どもの自立の為に関係機関の方々と連携を心がけていきたいと思ひます。今後ともご理解、ご協力をよろしくお願ひいたします。

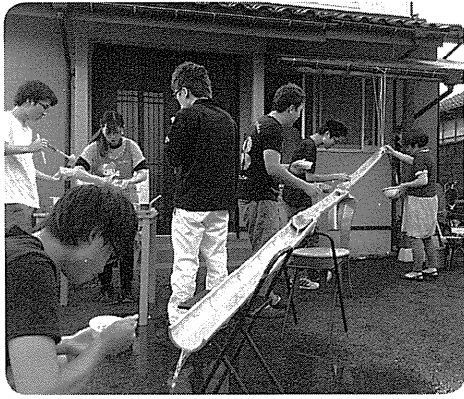
自立援助ホーム 鳥取スマイル

寮長 田村 崇

平成二十六年に関金町から鳥取市に移転してきて二年が経とうとしています。月日はとても速く流れるものだなあと感じてます。こちらの生活にも慣れてきて、地域の運動会や防災訓練などに参加させて頂いております。

現在鳥取スマイルでは男子五名が生活しています。それぞれが多様な個性を持ち、それゆえに社会生活の難しさや生きづらさを感じながらも自立していくための生活を一歩ずつ歩んでいます。

我々自立援助ホームスタッフは縁あつ



そうめん流し

て、青少年たちとの出会いの中で日々の生活を営んでいます。当たり前前の生活を心がけています。当たり前……。我々は簡単に「当たり前」の「普通」の生活と違ってしましますが、これがまさに彼ら彼女らが一番難しく感じることで、経験していないことで、不安を感じる事なのではないかと思っています。ある少年が「自由が怖い、暇な時間が怖い不安」と打ち明けました。切実なる思いだと感じました。いつまでもホームの中で生活していくわけではなく、やがてホームを離れそれぞれ次のステージへ進んでいきます。我々は、そんな若者たちがホームを出て新生活を始める時に少しでも不安が無いようにと思い、日々の暮らしの中で彼ら彼女らと一緒に少しずつですが歩んでいくよう心がけています。

本当にさまざまな境遇の中で育ってきた個性豊かな若者たち。そして我々自立援助ホームスタッフも同じで、個性豊か

です。いろんな人がいていい。相手を尊重する。自分を大切に。相手を思いやる。自分をしっかり主張する。日々の生活の中に色々な人間模様があり、他人とのコミュニケーションがあり、考え方の違いがあったりする。でもこれが社会なんです。ホームの中で、人と人との関係性の中で、いろんなことを経験し、学

び、時には失敗し、喜び、怒り、哀しみ、楽しみを繰り返す。何もそれは若者たちのことだけではなくて、我々スタッフも同じです。そうやって私たち（若者とスタッフ）は、成長しているんだなと感じます。

繋がりと信頼（フレンド）、安心と自信（スマイル）を大切に、一人一人の存在を尊重しながら、そして社会の中でかわりのあるすべての人との「和」の中で、協力し助け合いながら進んでいきたいと思えます。

今後とも、皆様のご支援とご理解をよろしくお願いいたします。

地域若者サポートステーション事業 とっとり・よなご若者 サポートステーション

★とっとり若者サポートステーション

就職応援プログラム

「ホンキの就職」を開始!

相談支援員 塩田 悠

とっとりサポステでは、就職や進路選択の悩みを抱えた若者の支援を実施し、

九年目を迎えています。

当所で行っている、相談、グループワーク、レジャヨフ（職業講話、職場見学、職場体験等）を利用されている若者は、数カ月経つと、就職活動の段階に至ります。しかし、求人への応募のハードルが高く、就職活動へ踏み出しにくい方が多くおられました。そのため、就職活動にスムーズに繋がっていくという支援が当所での課題ともなっていました。

そんな中、リクルートホールディングスが、社会貢献活動として開発した若者のための就職応援プログラム『ホンキの就職』を提供いただくこととなり、今年八月に初めて開催致しました。

このプログラムは、全国のサポステ七十一カ所ですでに導入され、二万人以上が受講しています。また、受講者の三カ月以内就職内定率が七十%以上という実績もあります。

内容としては、グループ活動を主に、仲間の力を借りながら、得意なことを明確にして自信を持って就職できるようになること、を共通の目標として、四日間て三件の求人応募へ取り組みます。また、応募活動を習慣化する仕組みや、得意なこと、をベースに、幅広い職種選びができるコツ、面接で自信をもって話せるメソッドを学ぶ、このプログラムをや

りきる事ができれば、自然と自信に繋がる内容となっております。

第一回は、六名の方が受講されました。採用試験突破の自信が無く、求人への応募に一歩踏み出せない現状を変えたい方、不採用が続き、職種幅を広げるためのヒントを得たい方、対人関係に悩み、他者との関わりに不安を感じている方など、それぞれが様々な想いを持ちながら初日を迎えました。初日はお互いに遠慮が感じられましたが、日を増すことに打ち解け、休憩中なども、自然に会話が弾んでおられました。また、三件の求人応募ができた方や、一件以上の応募ができた方がおられ、最終日には「一生の思い出になった」「協力して大変なことを乗り越えるという経験ができた」「自分一人では限界があったが、人に意見をもらえることで新たな発見になった」「色々な人の考え方や、やり方を学ぶことができた」「このプログラムで練習したことが本番の面接で発揮できた」という感想があり、受講者それぞれの今後の就職活動の自信や励みとなった様子でした。

今後、第二回は十一月二十八日から西部にて、第三回は一月十二日から東部に開催を予定しております。働きたい若者が、スムーズに就職活動に進めるよ

う、サポートも変化しながら、一人一人の一步を大切に、サポートしていきたいと考えております。

★よなご若者サポートステーション

新たな取り組み

総括コーディネーター 山田 香子

よなご若者サポートステーションは、十五歳から三十九歳までの原則、現在、在学・在職をしていない若者に対して就職に向けたサポートをしています。

鳥取県全体としての有効求人倍率は昨年度、全国平均並みの値となり、高校生の就職率もほぼ100%に近い状況となりました。米子市にも次々と新しい店がオープンし、求人がたくさんあるように思えますが、だからといってサポートステーションを利用される方が、応募できる求人なのかという点、なかなかすぐに応募できない現状があります。今年の七月にサポートブック研修に行った際、ごこのサポートステーションでもこのような問題を抱えていることがわかりました。

今年度、よなごサポートステーション「共考共翔」を掲げ、サポートステーションに訪れる方々と共にあるにはどのような

たらよいのかということを考えました。新たな取り組みとして、同法人内のみならず作業所での職場体験をする機会を設けたり、新たな職場体験先として、境港市民図書館での職場体験を開始しました。図書館での職場体験も興味を示される方が多く、改めて、サポートステーションに訪れる皆さんの就業意欲について確認する機会となりました。

さらによなごサポートステーションで、「しごと体験」という内職に近い作業を体験できる機会を作りました。「しごと体験」とは職場体験に興味はあるものの、なかなか一歩が踏み出せない方が前にふみだせるように実施しています。そして「誰かの役に立っている」「少しでも仕事をしたい」という体験が、参加されている方にとって、少しずつ就業にむけた一歩へとつながっています。

鳥取県西部地域での開所当初のニーズは、まず「人に慣れる」「外に出る機会を増やす」ということが多かったのですが、今年度は、「就業にむけた取り組み」に意欲を示される方が多いように感じております。

みなさんの活動内容をブログ等で報告させていただくことにより、興味を示される方が増え、毎週農作業の職場体験に行くようにもなりました。また他機関か



しごと体験

らも職場体験についての問い合わせがあるなど、開所した当所には予想していなかった出来事が増えつつあります。

これは私たちの力だけではなく、本当に地域のみなさんや法人の皆様の力を借りて実現していることです。

それでもまだまだサポートステーションの活動について知られていないこともあり、これまでの実績を外に発信し、一人でも多く就業にむけた支援を求めておられる方に、サポートステーションが届くように、これからも新たな取り組みの機会を増やしていきたいと考えております。

鳥取養育研究所

鳥取養育研究所の歴史

事務局長 藤野 謙一

鳥取こども学園百十周年に際し、鳥取養育研究所の歴史を大まかに振り返ってみたいと思います。研究所の前身（鳥取養育研究会）は、研修や勉強会等が未だ

今ほどなかった時代の一九八六年に遡ります。藤野興一（現鳥取こども学園園長）が、北海道にある児童養護施設美深育成園を訪問したとき、「養育研究所」（ここでは、発達論等の勉強会が行われていた）の存在を知り、鳥取でも研究所を設立したいと思ったことが発端です。鳥取県内の児童に関わる関係者の飲み会の席で、数人が「理論と実践を統合した研究会を発足しよう」と一致団結したことで一九八六年四月に鳥取養育研究会は誕生しました。最初に取り組んだのは、毎月の勉強会です。この勉強会の特徴は、理論講義の後に実践者が事例発表を行うというやり方で、この勉強会十六回分の内容を「鳥取養育研究会会誌No.1」（一九八六年四月～一九八八年三月）

（鳥取養育研究会運営委員会／一九八九年十一月／定価二、五〇〇円）にまとめ、発刊しています。この研究会での取り組みは、『幼児の集団養護はやめよう』『不登校児童の対応』等の実践改革、『全国養護施設高校生交流会』への関与、『児童家庭支援センター』の実践的提案（児童福祉法改正への意見書）、「鳥取県内の児童関連機関の連携」等に結果しています。

二〇〇五年七月、鳥取養育研究会の中心的メンバーだった方々のアドバイスを頂きながら、三年間の勉強会を経て田丸敏高（現福山市立立大学教育学部学教授／鳥取こども学園理事）が会長となり、二十～三十代が運営する形で第二次鳥取養育研究会が発足しました。二〇一二年六月には、研究会を引き継ぐ形で社会福祉法人鳥取こども学園の公益事業「鳥取養育研究所」が設立され、現在に至っています。研究所は、現在百名の所員が所属しており、研究、イベント、勉強会等を行っています。これからも「すべての子どもたちに、人間としての尊厳と子どもらしい生活、多面的で調和のとれた発達を保障するために」理論と実践を突き合わせ、諸領域を含めた新たな養育理論を構築していきたいと思えます。研究所では、鳥取県内外を問わず、研究所の趣

意に賛同し、熱意のある方なら誰でも会員登録できます（ただし、役員会の承認は必要です）。是非、仲間になってください！

◆鳥取養育研究所

ホームページ：<http://youken.info/>

障がい者福祉サービス事業所 はまむら作業所

関わり方

サービス管理責任者 山岡 宏樹

当事業所では、「関わる事」、そこから学びを開発当初より大事にし、はまむら作業所以外でも活用できるように大切にしています。はまむら作業所の利用者さんは、朝出勤してから、夕方帰宅するまでに、多くの「関わり」を通し、学びを得ています。例えば、御家族、自宅付近のお店の方、公共交通機関、事業所スタッフ、送迎車内の仲間、事業所のある地域の方々、出荷先・作業に関わる企業の方々、支援関係者さん等。一日を振り返っただけでも、かなり多くの方と関わりがある事がわかります。事業所の利用者さんは、様々な事情（知的障がい・



作業風景

精神障がい等）から、他者とのコミュニケーション・関わる事自体が苦手であり、他者との距離感がわからず、そのストレスから体調管理に苦労し、日々失敗と成功を重ねています。一人ひとり異なる、この「関わり」について、支援員と一緒に考え、事業所内のグループワークで話し、地域の方々を含む支援関係者の方々に助言や指導をいただき、自分でも考えてもらうなど、学習を重ねています。その学習の結果は見えにくく、わかりにくく、利用者さんも苦戦をしていますが、個々、課題に向き合っています。その学び姿に、私達スタッフも学び、勇気付けられ、どうしたら事業所内外、社会参加できる人材に成長できるのか、一緒に考えるエネルギーになっています。

開所してから約五年経過する中で、「は

まむら作業所の雰囲気の変化」を感じま
す。それは、「朝のミーティング、作業
前ミーティングの雰囲気」、「チームでの
作業や活動、休憩の雰囲気」、「他者との
関わりが必然的に生じる時の雰囲気」の
変化です。当初は、他者と活動する事自
体が出来ず、また、職員も利用者さんの
個別対応や利用者間の関係調整に追われ
る日々が続いていました。個々に異なる
こだわりや関心、他者との距離感等に
は配慮し、対人関係においての課題を、
日々の関わりや学びと共に解決してい
きました。また、自分の事を相談支援専門
員等、支援関係者さんにも話す事ができ
るよう指導・助言していききました。さ
らに、地域の方に礼儀正しく接すること
も。結果として、対人関係の事が苦手な
方も、「関わる中で、課題を解決してい
こう」という雰囲気、風土が生まれ変化
して来たように感じます。これは、事業
所として大きな成長で、大変嬉しく感じ
ている事です。

他者との関わりは、一生続きます。こ
の身近な教材や気付き等を活かし、ひと
りでは悩まず、多くの方々（事業所内、
法人内、各関係機関の方々）の助言や
御指導を頂戴しながら、充実した社会生
活を送ってもらいたいと、特に強く思い

ます。

これからも「働く仲間」として、社会
の一員として、チーム一丸となり応援し
ていきますが、地域の皆様、企業や支援
関係者の皆様、そして御家族様、どうぞ
今までの以上の「指導、応援」のほどよろ
しくお願い致します。

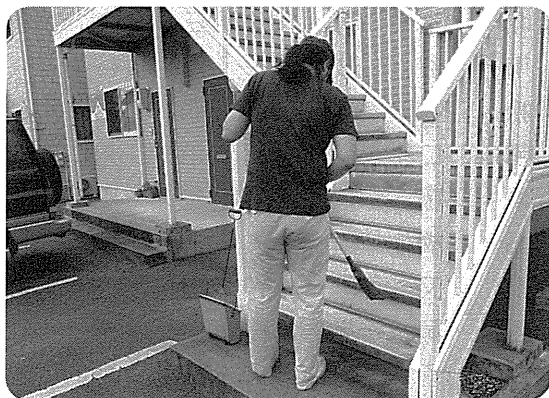
退所児童等アフターケア事業
ひだまり

自立に向けて

就労支援員 中村 徹

自立する上で大切なことは金銭管理と
就労です。ひだまりへの相談の多くは無
計画な支出による生活苦や生活環境の整
備、人との関わり方に伴う就労困難で
す。

そこでひだまりでは、相談者に対して
一人一人週毎に計画的支出となるよう話
し合い、少しずつではありますが貯蓄で
きるよう支援したり、相談者と一緒に清
掃やゴミの分別、庭の草取りを行って生
活環境を改善したり、就労体験や職場見
学、働きやすい環境づくりのための雇用
主との協議を行ったりしています。



就労体験

これらの対処的支援に加えて、今年度
は毎日新聞大阪社会事業団の助成を受
け、県内各児童養護施設の児童を対象に
した自立のための研修「ひだまり自立研
修」を実施することとしました。

第一回目の研修は、講師に元日本海テ
レビキャスター福浜隆宏さんを講師に迎
え、鳥取県でも学園の高校生を対象にし
て、「コミュニケーションの取り方」楽
しい職場にするために」というテーマ
の研修をしました。福浜さんのことも時
代からキャスター時代の様々なエピソード
をもとにした「コミュニケーションの大
切さや上手にコミュニケーションをとる
コツの話は、楽しく、さすが話のプロで
した。おかげで参加した高校生はグルー

プでの実習では積極的に福浜さんや中嶋
所長に話しかけ、研修の成果をみるこ
とができた手応えある研修でした。

この研修は、西部でも実施する予定で
す。

また、金融教育についての研修を十一
月に東部・中部で開催する予定にしてお
ります。

これらの研修を通して、自立への基礎
固めをし、健全な自立へと進んでいって
くれることを願っています。



研修風景